

第4分科会 小学校 [保健研究部]

「意欲的に課題を追究し、よりよい自分を築いていく子の育成」

～保健領域における主体的・対話的で深い学びによる課題解決的な学習を目指して～

横浜市立小学校体育研究会 保健研究部

横浜市立梅林小学校 石川 祐太

1. はじめに

本研究部では、課題解決的な学習の過程を通して生涯にわたって健康で安全な生活を送ろうとする「意欲や態度」「思考力、判断力、表現力等」「知識及び技能」といった資質・能力の育成を図り、適切な意思決定や行動選択、表現力や実践意欲を育成していくことを基本的な考え方としている。

保健研究部の過去5年間の研究は、次の通りである。

	令和元年度 (2019)	令和2年度 (2020)	令和3年度 (2021)	令和4年度 (2022)	令和5年度 (2023)
前年度からの課題	<ul style="list-style-type: none"> ▲資料の内容や提示の仕方 ▲「何を教えるか」から「何を考えさせるのか」へ（「いつ」「何を」「どのよう」に考えさせるか） ▲実践事例の充実に向けて（研究内容や解説書の検証） 	<ul style="list-style-type: none"> ▲思考場面や振り返り場面の教師のしかけ ▲児童の考えのまとめ方の改善 ▲授業のタイムマネジメントの工夫 ▲手立てや学習内容の精選 	<ul style="list-style-type: none"> ▲単元構想の見直し ▲主体的・対話的で深い学びの中で資質・能力が育つ子どもの具体的な姿 ▲学習評価の客観性・妥当性 	<ul style="list-style-type: none"> ▲ICTの効果的な活用 ▲「十分満足できる」児童の姿の想定と共有 ▲多様性を考えた単元構想 ▲学習のねらいに合わせた様々な形の学習カードの工夫・検討 	<ul style="list-style-type: none"> ▲教師の問い（発問）や課題解決のための活動が適当なものであったのか、多角的な視点で検証する必要がある。
本年度の研究課題	<ul style="list-style-type: none"> ①健康課題に気付き、思考するためのしかけ ②子どもが主体的・対話的に活動する授業形態 ③知識・技能を深めるための単元構想 	<ul style="list-style-type: none"> ①「学習指導」の側面から ②「学習評価」の側面から ③主体的・対話的で深い学びを実現する教材研究 	<ul style="list-style-type: none"> ①自らの健康課題に気付き、学びを深めるための教師のしかけ ②学びをつなぎ、広め、深める単元構想 ③学びを構造的にとらえる学習カード 		<ul style="list-style-type: none"> ①子どもが主体的に課題解決に向かう導入や発問の工夫 ②課題解決的な学習の進め方

これまで、保健領域についての理論研究をもとに、保健研究部の部員による実践提案を通じた活発な議論と、市一斉授業研による検証により、たくさんの成果が明らかになってきた。さらに、もっと授業をよりよくしていこうという部員一人ひとりの次への課題の発見が、次年度の研究課題へとつながり、三つの資質・能力の育成に向けて取り組むことができた。

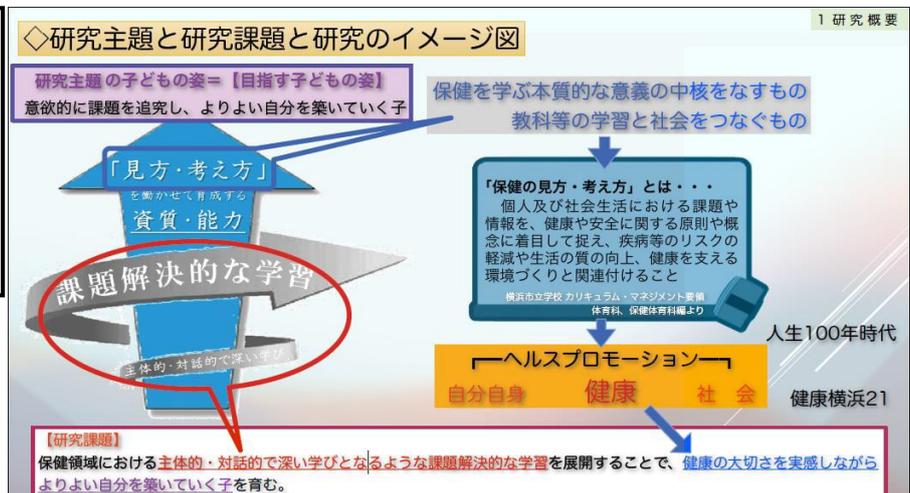
以上のことから、令和5年度も ①教師のしかけ ②単元構想 ③学習カード をベースに研究を進め、次に掲げる研究課題を通して児童が実践的・課題解決的に学習を進めることができるように研究を進めてきた。

2. 研究の概要やねらい

本研究部の研究課題

保健領域における主体的・対話的で深い学びとなるような課題解決的な学習を展開することで、健康の大切さを実感しながらよりよい自分を築いていく子を育む。

学習指導要領では、教科等の目標が3つの資質・能力に基づいて明らかにされ、主体的・対話的で深い学びの実現



に向けた授業改善を実施することが求められている。そのために、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることの必要性や、組織的・計画的に各校の教育活動の質の向上を図っていくこと（カリキュラム・マネジメントの推進）が求められている。

子ども達が体育や保健の見方・考え方を働かせ、指導内容を身に付けていく過程の中で、変化の激しいこれからの社会を生きていく力（「生きる力」）を育てていくために、私たちはどのような授業をすることが求められているのか、児童の知識や思考を揺さぶる授業について、保健領域を通して考えていきたいと考え、上記の研究課題を設定した。

そこで、今年度は課題解決的な学びの過程の中でも特に「課題の発見・把握」にスポットを当て、

視点① 子どもが主体的に課題解決に向かう導入や発問の工夫

（子どもが主体的に取り組むことのできる課題との出会い方や知識や思考を揺さぶる切返しなど）

視点② 課題解決的な学習の進め方

の2つの視点を追究してきた。

3. 研究について

視点① 子どもが主体的に課題解決に向かう導入や発問の工夫について

1-1 モジュール (1M=15分) を活用した学習の入口

子どもが保健の学習と出会う入口

「保健学習が楽しみ!」「健康でいたい!」
「これからの保健の学習や自分の将来への期待」

【M(モジュール)を活用した学習の入り口と出口】

これから始まる保健の学習を楽しみにする気持ちや大切に思う気持ちをもって学習に臨んでほしいと思い、単元の前後 1M ずつ時間をとった。

保健は健康に生きていくための力を身につける学習であることや、自分の将来のことについて話し合ったことで、「学習が楽しみ」「健康でいたい」など、これからの保健の学習や自分の将来への期待感を高めることができた。

単元の終わりの振り返りにあたる出口では「将来の夢のために健康でいたい」「自分のためにも頑張りたい」「これからの保健が楽しみになった」など、将来的に健康でありたいという願いや、今後の学習へ期待がさらに高まり、自分の健康観のアップデートに繋がった。

2 保健の学習の大切さを実感できるための種まき

単元構想

子どもの見取り

種まき = 単元構想 × 子ども理解

総ての時間は「健康教育」

【保健の学習の大切さを実感できるための種まき】

単元構想：体育科保健領域の学習を中心に学校生活のあらゆるものの中で、学習につながるかもしれない事柄を指導計画に盛り込んでおくという考え方

子どもの見取り：一般級でも子どもたちの健康課題を把握したり、傾向や特徴を把握した上で学びをデザインしたりしていくことはかなり有効的だった。「個別最適な学び」のヒントにもなった。

単元構想 × 子ども理解 = 種まき

→ 総ての時間は健康教育につながっているということが見えてきた。

視点② 課題解決的な学習の進め方について

3-1 学習計画に合った「発問」の工夫

本時目標へ向かうための主発問の2段階化

健康＝元気？



①健康とはどんな状態か？
→真の学習課題(②)を引き出すための主発問

②健康のひけつとは？
→本時課題

3-2 学習計画に合った「発問」の工夫

子どもの無意識を意識化したり、疑問を持たせたりするための補助発問(揺さぶり発問)

・児童による捉え違いの明確化

走る なわとび

スイミング 野球

・自分の考えの根拠は何か

本 親

ネット



4 課題解決的な学習の可視化

板書と学習カード

板書

高木田小 授業より

学習カード

ふりかえり

・本時の学習内容をどれだけ自分のこととしての価値を見出し、実感できているか

・次の課題のつぶやきやこれからの健康に対しての展望が現れていると素敵(実践への意欲)

大人になっても、課題解決的な生き方ができる素地となりますように

課題の発見・把握
・子どもの学習課題になっているか
・思いがそこにあるか

課題の追究
本時目標に到達しうる
・学習活動(学び方)
・適切な資料(教材)

解決・まとめ
本時目標とのズレはないか
・子どもがまとめたか

構造化された学習展開は、意図的な評価の見取りもしやすくなる



5 チーム健康教育

子ども

専科・級外

児童支援専任

地域

養護教諭

保護者

担任(学年)

学校医

学校薬剤師

栄養職員

チームティーチングは、学校の実態による。しかし、授業外(前後)で繋がっておこうとすることは大切



【学習計画に合った「発問」の工夫】

3年生の第一時。本時目標へ向かうための主発問は意図的に2段階にした。保健の学習を初めて迎える3年生は、「健康って元気なこと?」といった程度の感覚的で抽象的なとらえの子が多いので、まず第一段階として、「健康とはどんな状態か」という点をクリアにする発問をかけ、第二段階として、本時目標となる真の学習課題を引き出す「健康のひけつとは何か」という発問をかけ、学習課題を設定した。

主発問を2段階にすることで、自然な思考の流れで2の主発問に繋げることができ、スムーズにその後の活動に移ることができた。

【無意識を意識化する補助発問や子どもが疑問をもてるような補助発問】

同じ時間の中で、全体共有の中で子ども自身にとっての運動とは何かを質問したり、また自分達の考えの根拠は何なのかを聞いたりし、揺さぶりをかけた。何となくそう思っていた事に対しても「自分にとってはこうだ」「本当にそうなのかな」「何が正しいのかな」と改めて考えることにつながった。

【課題解決的な学習の可視化の有効性】

可視化の具体＝「板書と学習カード」

どの時間も板書と学習カードはその構造がリンクしており、課題解決的な学習のプロセスに沿っているものになるように努めた。

学習のプロセスとは、「課題の発見・把握」「課題の追究」「解決・まとめ」「ふりかえり」(枠内の赤字が、それぞれの段階でのポイント)構造化された学習展開は、「どの場面でのどのような姿を見とるのか」という意図的な評価もしやすくなる。

【チーム健康教育】

通常は、担任が一人で授業を指導していくことが多いが、保健領域の特性上、学習内容に応じて、様々な立場の人が、人的資源として学習を支えることも学びを深めたり広げたりすることにつながる。担任やクラスメイト以外の「人」も課題の解決のための生きた資料になる。

どこまでできるかは学校の実態によるが、担任と同じように、一緒になって子どもたちの健康課題に向き合ってくれる存在は貴重である。一緒に教材研究を深め、一緒に授業をつくっていく機会がもてれば、その効果が高まることははっきりとわかった。

4. 研究の成果と課題

【成果】

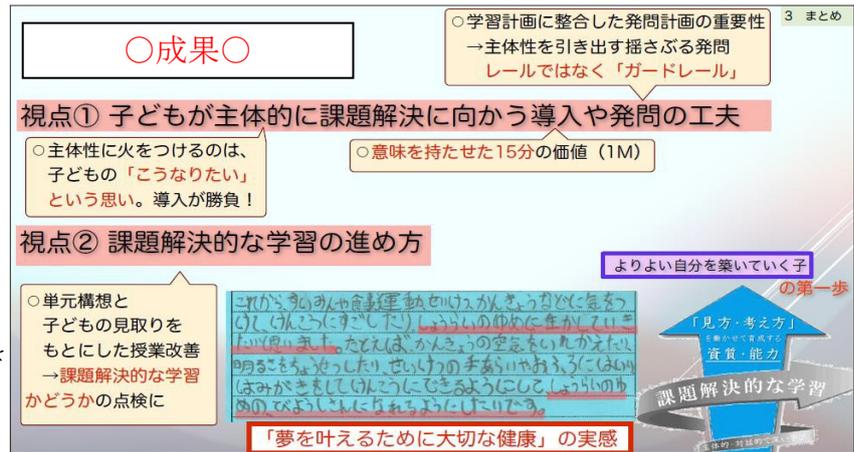
○子ども達が主体的に課題解決の土俵にのるために大切なのが、「こうなりたい」という願ひである。その思いをもって学び始めることが主体性に火をつける。1Mで導入を工夫することができた。

○子どもたちの主体的な学びを継

続させるのに欠かせないのが、やはり教師の意図的発問である。発問は目標に向かって自走する子どもたちをレールに乗せて引っ張るのではなく、途中、脱線しないように、でもきちんとゴールに辿り着けるようにガードレールのような役割をもつものになっているかがポイントであるということがわかった。

○単元構想と子ども理解をもとにした学習のデザインの大切さ。課題解決的な学習展開になっているかどうかをしっかりと点検しながら授業改善を行なうことも積み重ねができた。

◎「見方・考え方」を働かせて高めた資質能力をもって、「よりよい自分を築いていく」第一歩を歩み出せた、まさに自分の夢を叶えるために大切なのが健康であることを実感している姿をみることができた。



【課題】

▲子どもが主体的に課題解決をしている授業を目指して、もっと「子どもに学習を委ねる」ことを意識していくという点に課題が残った。教師がガードレールになるような授業でのファシリテーションの具体を考えていきたい。

▲発問の言葉・タイミング・種類の

精査についても、「学習課題の解決に添った主発問」「子どもの無意識を意識化する補助発問」「子どもの「今」を掴む鮮度のある補助発問」など、主発問と補助発問の整理分析にまだまだ必要感を感じている。

▲課題解決的な学習に不可欠な時間として、ふりかえりの時間を充実させることにも課題が残った。ふりかえりは、自分自身の健康観をアップデートさせるために大変重要な時間である。5分でも、3分でも、しっかりと時間をとって学びを個別化させていくためにできる学習展開の工夫や振り返りの中身についての研究も考えていきたい。

▲学習カードのさらなる進化の可能性も探していきたい。学習カードは、その単元を終えたら、その役目を終えてしまうことも多い。デジタルを生かしながら、キャリアパスポートのように次の学年でも自身の生きた資料として、引き継いでいくことは出来ないだろうかと考えている。

■今後は、「子どもに委ねる学習展開」「発問の工夫」「ふりかえりの充実」に視点を置きながら研究をしていきたい。

